ますから御斷り申します、大丈夫獅で極樂へ行かれるわい。

○坊主の思惑

何だ蕊婆々失敬な、佛樣へ御取次をする我々を大事にして置かぬと地獄へ落してしまふぞ、極樂へ行きたいかエ、矢張り極樂は宜いと見えるな、しかし地獄極樂への沙汰も金次第じや、極樂へ行きたいと思ふなら金を澤山上げるのじや、宜いか承知か合點か。のドン底へ落してしまふのじや、それが嫌なら地獄

○人力車夫の思惑

エ、旦那、お安く參りましやう、如何で御座ります、何方へ、旦那々々公園まで五錢で宜しう御座ります、アヽモシ〳〵旦那、一寸旦那と云ふのに…これ程云つても乘れないとは、金がないのか惜いのか、威張つて居る癖に逃げてしまふた、あれ〳〵下駄の減るのも衣服の切れるのも知らずに歩いて行く、一文惜みの百文知らず奴。

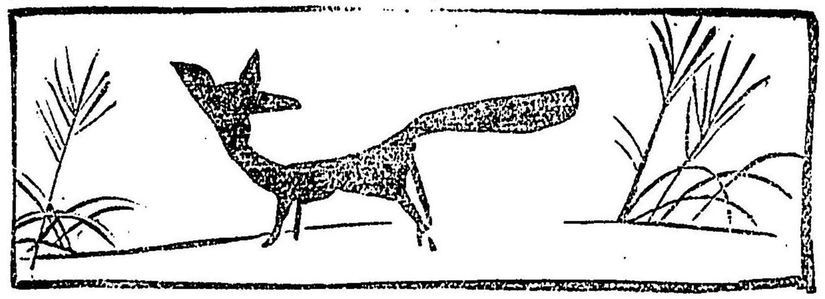
○人力客の思惑

あゝ煩さい、やつと逃げたと思つたら又向ふに居る、知つた車引が居ると乘らねばならぬから横道から拔けて行かう、車賃ほど馬鹿々々しいものはない、その錢で大福餅

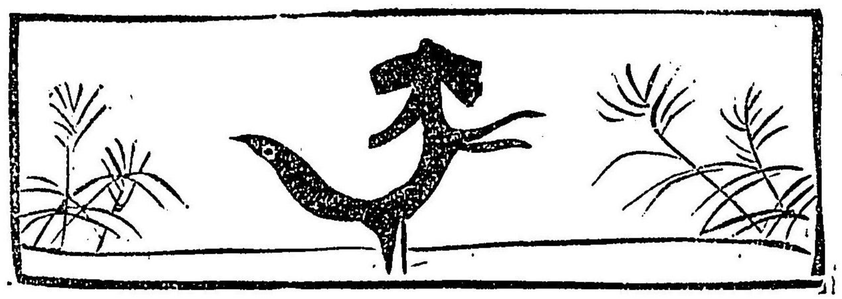
ても買つて行くと女房が大嬉び、そうだ〳〵それに限る。

恥の格言

○人を活す醫者誤つて人を殺す。
○下手な時計師反て機械を破壞す。
○八卦見自分の運氣を見る能はず。
○肺病の大妙藥を賣る家に肺病人あり。
○人の家内安全病氣全快の祈禱する坊主自分の家内安全病氣平癒を爲す能はず。
○生兵法を習ふて大怪我を爲す。
○下手な思案は止むに似たり。
○稅金を逃れんとして罰金に遇ふ。
○一攫千金を儲けんと欲して萬金を失ふ。
○嫁を度々貰ひ直して段々惡しくなる。
○虻蜂を取らんとして虻蜂に刺さる。

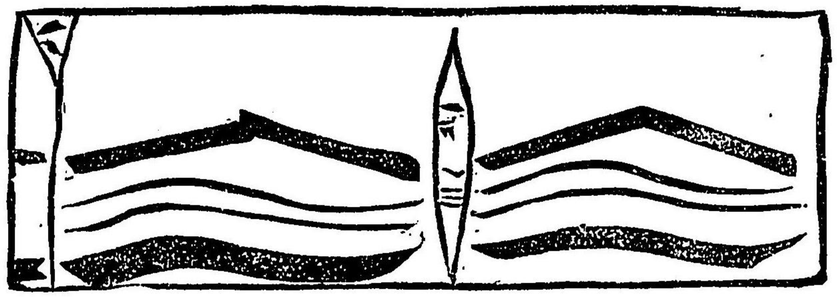


○蛇をつゝいて蛇を出す。
○哲學に凝り過ぎて發狂す。
○國民に有害不利なる決議を爲す代議士を國民より選擧す。
○人に八釜しく云ふ衛生係自ら食過呑過朝寢遊樂運動不足を爲し花柳病を感染す。
○息子に意見する親爺内密で淫狂を爲す。
○生噛の漢語を使ふて大恥をかく。
○白轉車乘り白轉車を破壞し白轉車を擔いで人力車に乘る。
○何々專門學校卒業と肩書は立派なれ共實地の經驗なくして役にも立たぬ人が多い。
○今の紳士は大抵造り繰り紳士なり。
○嗅の腰卷は紐でもつ、紐は虱でもつ、虱は皺でもつ。
○馬鹿な控訴をして原裁判より重くなる。
○情死を爲損ふて互に大怪我に苦しむ。
○金の無い時の儉約は馬鹿者でもする。
○人格を養成する學校不良學生を出す。

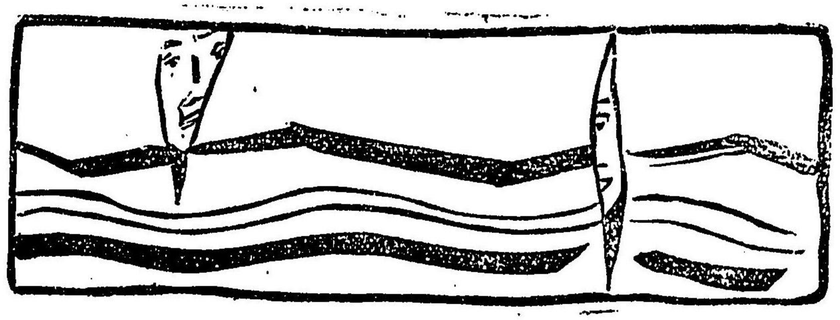


まるく盡し

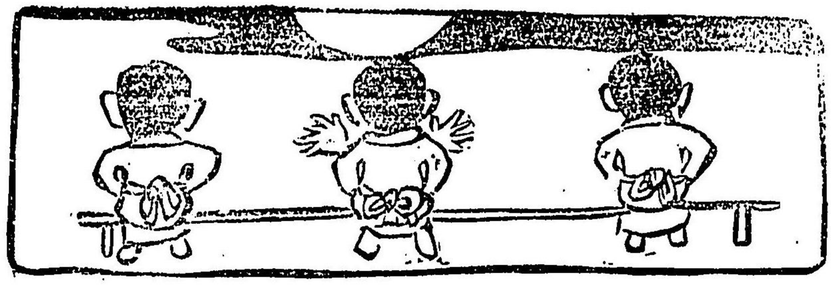
十五夜の月はまん　まる
高野まで親を尋ねた石童　まる
臭い物には蠅があつ　まる
船の名の尻につくは何れも　まる
天下泰平國家治　まる
貧乏人は金にばかりこ　まる
古い煙管はよくつ　まる
草葉に露のまん　まる
朱に交れば赤くそ　まる
結納もすんで婚禮の日がき　まる
佛は人にをが　まる
お茶を一伏く　まる



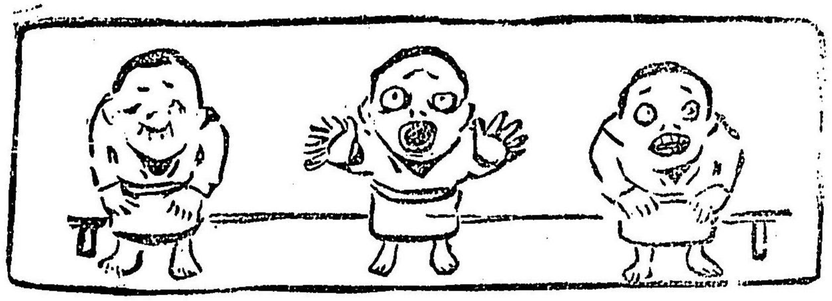
不都合極は まる
倹約すれば錢がた まる
拍子木が鳴れば鑿がはじ まる
艱難辛苦進退窮は まる
談判破れて戰爭がはじ まる
惡る事をして後て人にあや まる
川には まる
地球と手鞠はまん まる
剃立の頭はまん まる
雨降て地固 まる
日曜には學校が休 まる
親父にに まる
パッと浮名が世間へひろ まる
學校に生徒があつ まる



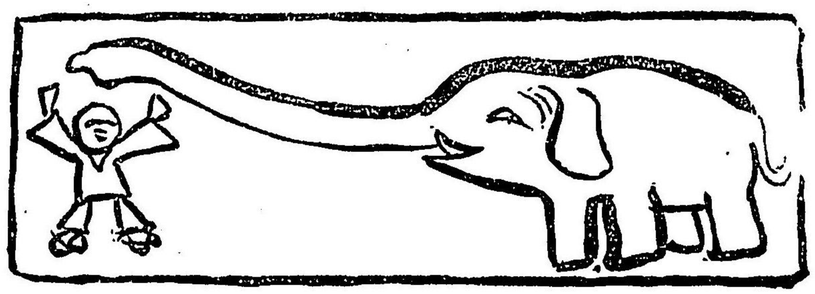
オギャアの一聲に赤兒がう まる
盜賊に金をぬす まる
義理にはさ まる
蛙は蛇にの まる
喧嘩に仲裁がは まる
庭の飛石下駄にふ まる
椀白小僧親の手にあ まる
蚤にか まる
竹に雀がと まる
新聞は朝々人によ まる
美人の姿が目にと まる
日が暮れて戸が閉 まる
息子の浮氣に花嫁が氣をも まる
金子返却の期限が迫 まる



惡人は惜く　まる
女郎に引張込　まる
停車場に汽車がと　まる
雷に臍をつか　まる
二十日の月は夜にあ　まる
噂がたか　まる
秘密談に聲がひそ　まる
女で魂がな　まる
炬燵であたた　まる
乞食は人に賤し　まる
呉服屋の古いのは大　まる
學者の若死人に惜し　まる
鼻を摘ま　まる
荷物は車に積　まる

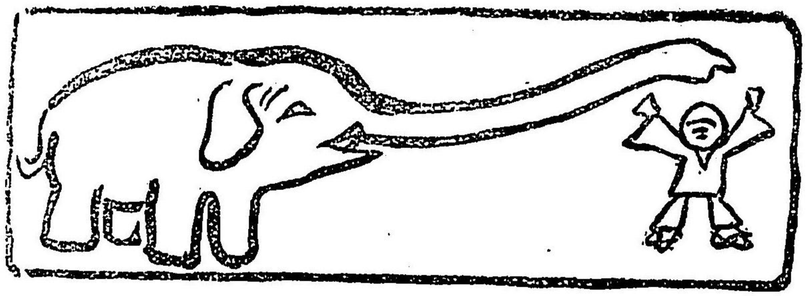


年よつて腰がかが　まる
若嫁に子が孕　まる
改心して放蕩が止　まる
日本の旅は日の　まる
美人に惚込　まる
下手碁はいつも圍　まる
無頼漢に怒鳴りこ　まる
宿屋に客が泊　まる
大吃驚に睾丸が縮　まる
都合よく話が纏　まる
内閣が代ると規則が改た　まる
子が出來て夫婦の縁が固　まる
人の家を覗いて盗賊かと怪し　まる
こんな事を書れてこ　まる

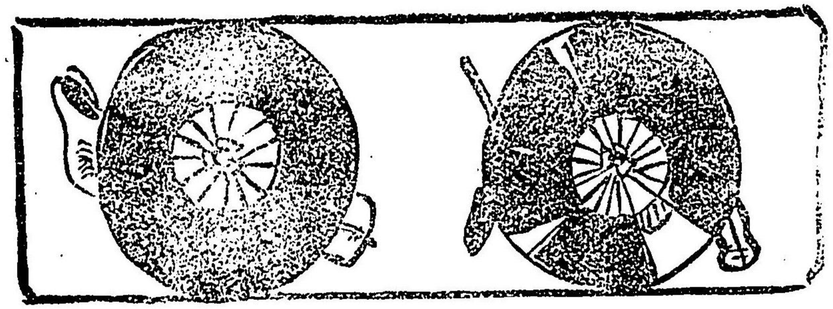


いろは謎掛

○いの字とかけて　船頭の手と解く　心は　櫓の上にあり
○ろの字とかけて　露と解く　心は　葉の上にあり
○はの字とかけて　荷持の辨當と解く　心は　荷の上にあり
○にの字とかけて　秋の田の雀と解く　心は　穂の上にあり
○ほの字とかけて　忍び返と解く　心は　塀の上にあり
○への字とかけて　研ぎかけた庖丁と解く　心は　砥の上にあり
○との字とかけて　掃溜の鳥と解く　心は　塵の上にあり
○ちの字とかけて　軒の踏石と解く　心は　戸の下にあり
○りの字とかけて　井と解く　心は　地の下にあり
○ぬの字とかけて　塵埃箱の底と解く　心は　塵の下にあり
○るの字とかけて　馬の尻に積んだ荷と解く　心は　尾の上にあり
○をの字とかけて　紀伊の紀三井寺と解く　心は　和歌を下に見る



○わの字とかけて　鎮守の社と解く　心は　岡の中にあり
○かの字とかけて　桶の底と解く　心は　輪の下にあり
○よの字とかけて　苔代の蛙と解く　心は　田の上にあり
○たの字とかけて　早朝と解く　心は　夜の次にあり
○れの字とかけて　士官と解く　心は　卒の上にあり
○その字とかけて　行軍の兵士と解く　心は　列の中にあり
○つの字とかけて　樹木の垣と解く　心は　根の上にあり
○ねの字とかけて　阿漕の浦と解く　心は　津の隣にあり
○なの字とかけて　植木鉢の底と解く　心は　根の下にあり
○らの字とかけて　押した印章と解く　心は　名の下にあり
○むの字とかけて　三笠山と解く　心は　奈良の奥にあり
○うの字とかけて　井筒と解く　心は　井の上にあり
○ゐの字とかけて　野雪隱と解く　心は　野の上にあり
○のの字とかけて　取次の間と解く　心は　奥の前にあり



○おの字とかけて　八の字と解く
心は　九の字の上にあり

○くの字とかけて　箱根の湖水と解く
心は　山の上にあり

○やの字とかけて　若い相撲取と解く
心は　幕の内にあり

○まの字とかけて　頭の簪と解く
心は　毛の上にあり

○けの字とかけて　麓と解く
心は　山の下にあり

○ふの字とかけて　取り立ての餅と解く
心は　粉の上にあり

○この字とかけて　佛堂の中の机と解く
心は　經を上に載せる

○えの字とかけて　孫と解く
心は　子の下にあり

○ての字とかけて　夜明の鐘と解く
心は　朝より前にあり

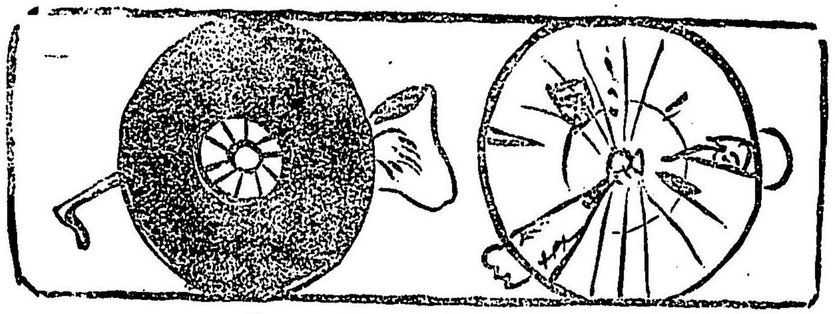
○あの字とかけて　押へられた蚤と解く
心は　手の下にあり

○さの字とかけて　山の猿と解く
心は　木の上にあり

○きの字とかけて　風呂の蓋と解く
心は　湯の上にあり

○ゆの字とかけて　樵夫の小屋と解く
心は　木の下にあり

○めの字とかけて　十二支の辰と解く
心は　巳の上にあり



○みの字とかけて　辨當の梅干と解く
心は　飯の中にあり

○しの字とかけて　夜中の寢覺と解く
心は　夢見て後にあ

○ふの字とかけて　吸ひ付ける煙草と解く
心は　火の上にあり

○ひの字とかけて　浮草の花と解く
心は　藻の上にあり

○もの字とかけて　雲と解く
心は　日の下にあり

○せの字とかけて　雛鳥と解く
心は　巣の上にあり

○すの字とかけて　腰の犢鼻褌と解く
心は　背の下にあり

○んの字とかけて　比叡山と解く
心は　京を下に見る

○京の字とかけて　舌切雀と解く
心は　舌なし

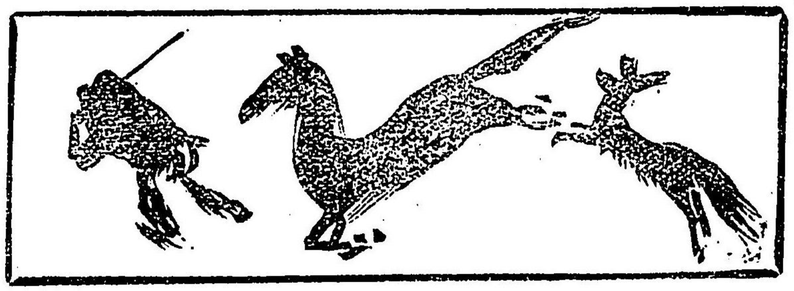
口

天に口あり壁に耳
詩歌の口吟み
開いた口に牡丹餅

口は禍の門
幇間の輕口
落す口の端の飯粒

自慢の口辨慶
小僧の馬鹿口
紳士の口髭
寺院の鰐口
醬油の片口
口も八丁手も八丁
商ひの口錢
奉公人の口入
活花の口傳
呂の字は口二つ
刀の鯉口
耻かしい口
江口の遊女
城の大手口

裁判の口頭辯論
女の差出口
美人の口紅
蛙の大口
樽の呑口
嫁憎い姑の口
儲け口
娘の嫁入口
博士の口演筆記
品の字は口三つ
烟管の吸口
口達者な慾婆
齋藤瀧口入道
芝居の木戸口

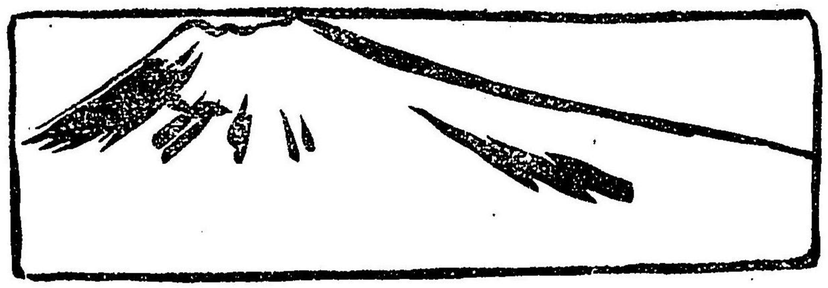


電話口
商品の賣れ口
たつた一口下戸の酒
一寸申上る口上
一口に飲む粉藥
良藥口に苦し
娼妓の口車
女に口説かれ
口を極めて譽める
昔の口書爪印
媒酌人口
一口噺
雜誌の口繪
銀行の小口預金

郵便の差入口
店の出入口
茶道の三口半
講釋師の口調
三口程に飲む水藥
口に蜜あり腹に劍
變りやすい口約束
男に捨られ口惜しい
口を曲げて怒る
今の口供筆記
卑賤な口
地口合せ
帳簿の口分け
振替貯金の口座

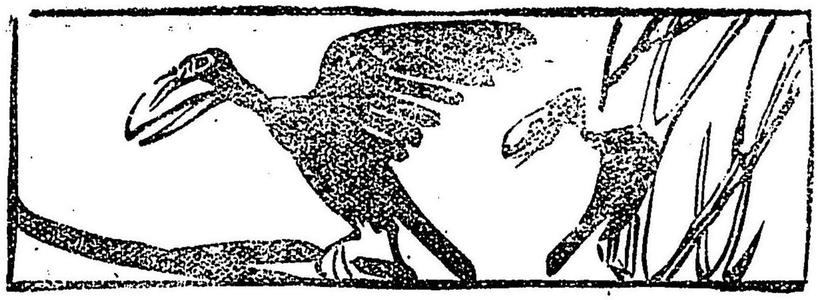
口上手
戯談口
一口摘み食
徳利の口
隧道の入口
富士登山の御殿場口
御邸の勝手口
藥劑師の大木口哲
死人に口なし
經を讀む坊主の口
絲を吐く蠶の口
口を突らせ
瓢箪の口から駒が出
口論の果が喧嘩

口で失策
負惜みい減らず口
糊口に窮す
土瓶の口
鐵道の改札口
同頂上の噴火口
間口二間の裏住居
歌人の大口鯛二
口の端にのぼる噂
如來の金口の眞詮
蛇の口に蛙を飲込む
口を開ける
涎は赤ン坊の口から
口善惡なき



利口者
口笛
口僻
目元口元
口で鳴らす鬼灯
口へ入れる金米糖
口外を禁ずる秘密談
馬の口に轡
巾着の口を締め
雞口と爲るも牛後爲勿れ
犯罪の顯れ口
出入の戸口
邪人の毒口
談話の口振り

虎口を逃れ
口三味線
口不調法
口眞似
泣く兒の口に乳
口から吐出す唾
嗤の口は不具
狂犬に口輪
鞄の口を開ける
口角泡を飛ばす氣焰談
これは閉口
非常口
口と心と異ふ惡人
口開て見せる金の入歯

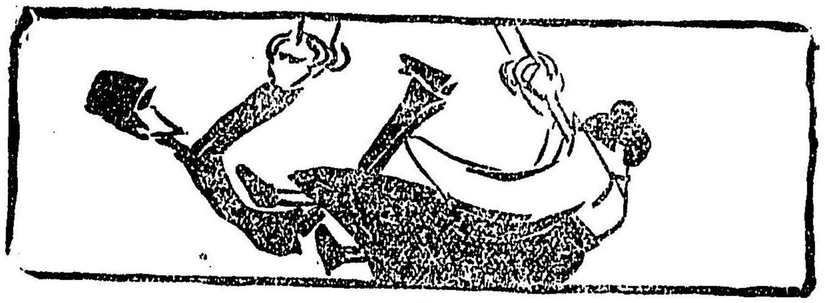


酒臭い上戸の口
親の口から子の自慢
落語家は口で稼ぎ
口と口とでする接吻
口先ばかりの親切
物凄い化物の口
冗口
乗人の口
ランプの口金
負傷の創口
口ばかり殊勝な坊主
口憎い高利貸の催促
口に合ふた肴
旦那の口から叱言

歯抜の口にとろゝ汁
子の口から親を罵る
口から出まかせ
口々の評判
可惜口に風ひかす
大きな神樂の口
悪口
爭ひの口實
尺八の歌口
大砲の口徑
鬱妓の世辭口
口汚い喧嘩の言葉
口に頬張る燒芋
奉公人の口から不足

妻君の口から嫉妬
日本の人口五千餘萬
東京の關口町芝口町
京都の寺町通荒神口
福岡の橋口町
武藏の川口矢口
越後の田口
攝津の塚口
甲斐の河口湖釜口溫泉
臺灣の大湖口錫口
滿洲の營口革河口
苗字の山口川口竹口池口大口小口關口牟田口田口矢口
鐵道の丹波口驛安治川口驛水口驛高野口驛吉野口驛和歌浦口驛京口驛溝口驛田口驛早口驛

妾の口から無心
山口縣の戸數十萬餘
大阪の川口
鎌倉の龍の口
備前の淺口郡
陸奥の早口
備前の野々口
播磨の京口溝の口
伊勢の大口灣
韓國の漢口水口鎭
清國の陵口



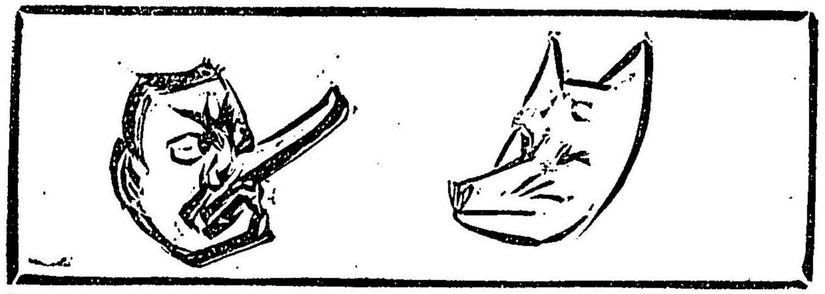
滑稽植物園

彼の娘は親の云ふ事をよく　菊
主の浮氣に氣を　榛
暑中休暇に學生は　桔梗
うか〳〵と月日が　杉
入獄は身から出た　栂
苦勞して末の樂を　松
釜の下を　竹
風呂が熱いから水を　梅
相撲の　葛蒲
貧乏人は損料で　刈萱
一筆文を　燕子花
貧乏人に金は　梨

頭の火傷で　櫟
放蕩息子は無心をよく　柚
不孝者は無分別な事を　椎
恥を世間に　柿
盜賊は人の衣服を　萩
戀は人目を　葱
三行半で縁を　桐
茶屋遊びは金を　槇
藤八拳をやらうかイヤ　柳
死人に　梔子
理由がわか　蘭
獨り思案を　土筆

尻盡し

○屁をこいて尻を閉める○尻から消えて行く花火○亭主を尻の下に敷く女房○女に目尻を下げる○借金の尻拭ひ○帳尻が合はぬ○頭隠して尻かくさず○眞赤な猿のお尻○尻の端へすえる寢小便のお灸○嫌な奴に尻を向る○肛門醫者は人の尻で飯を食ひ○尻くらひ觀音○御供は旦那の尻に付き○螢の尻光り○愛嬌振る犬の尻尾○茶釜の尻が洩出す○尻で消すゴム付鉛筆○尻をふり立てる天理教の踊○尻押し○尻髮げ○尻か頭か分らぬ蚯蚓○蜘蛛の尻から絲○仕方がないと尻を据える年期奉公○放蕩息子家に尻が据らず○針もつ蜂の尻○惡事露顯尻から見破られ○痔疾患者の尻腐る○尻餅をつく○尻に帆かけて夜逃げ○牛の尻を追廻す百姓○鍋の尻は眞黑○蝶舌て居る尻から顯れる嘘○尻馬に乘る○裸襌を當てる赤ン坊のお尻○尻に憤鼻褌をあてる○頭から尻へ魚の串差し○ツボンの尻が綻び○長尻のお客に箒を立て○尻から押出す○尻の腫物○炬燵て尻を暖める○反古は尻拭となる○大縮尻○雪隱て尻まくる○尻の重い無精男○尻の輕い浮氣者○德利の尻へ手を當てゝ見る酒の燗○尻髮尻蕊尻の穴○繼子の尻をひねる



○手紙の尻に書く處姓名日付○無學者洋書を尻から見かけ○鶺鴒の尻振り○馬の尻に鞭あてる○鮪の尻から最後尻○尻の下へ敷く坐布團○負け戰尻へ〳〵と退却し○年寄の尻は皺だらけ○尻の肉を切取つた男三郎○保證人は人の尻を引受ける○盜賊の尻追かける○長雨の尻で出水○尻鉄虫○尻の穴が痒い○苗字の田尻島尻野尻町尻池尻○大阪の尻無川○吉原の水道尻○周防の三田尻港○駿河の江尻○陸奥の尻内尻屋岬○常陸肥後の川尻○下總の川尻入景○陸中の黑澤尻○陸前の田尻○上野の大尻沼○豐前の池尻○北海道の尻羽岬燒尻島奥尻島利尻島

抱腹百話　終

明治四十三年九月十九日印刷
明治四十三年九月廿日發行

正價金三十錢

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目拾六番地　大月隆
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目三番地　水野弘
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目三番地　株式會社秀英舍第一工場
發兌元　東京市神田區錦町一丁目十六番地　文學同志會
大阪市江戸堀上通一丁目　文學同志會大阪支部

不許複製

東京新滑稽

一冊定價十錢
一ヶ年一圓二十錢
郵稅一冊一錢宛

▲毎月廿五日發行▼

苦界の生活に快感の趣味を得んとする紳士の好侶伴

發兌元

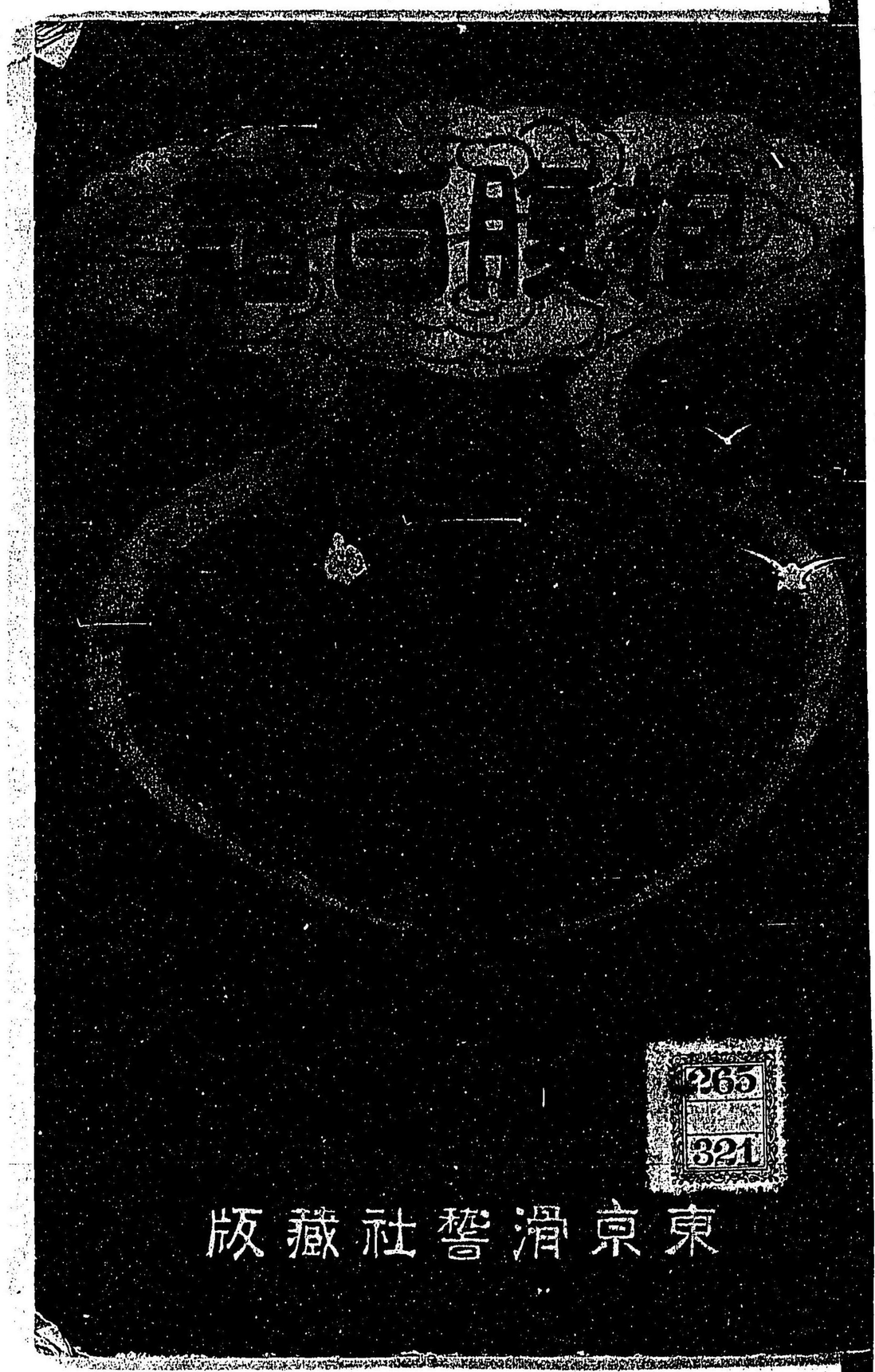
東京市神田區錦町一丁目十六番地

東京滑稽社

電話本局 一八八一
振替番號 六九二六

265
321

此瞻を如何せん



091874-000-2

特28-28

抱腹百話

文学同志会

M43

DBO-0406